

## 東 裕之作「天使のお仕事」

マサ(68):小川政弘

トシ(68):宮本正勝

ハル(68):村田 泉

ヒロ(36):東 裕之

高峰小百合(64):野村佳代

西條ちづる(44):大橋めぐみ

駅員・AD:畠山裕樹

客・会場アナウンス/案内係:野村波留子

アナウンサー:大橋めぐみ

### ●駅のホーム

駅員アナウンス まもなく2番線を快速白百合ヶ丘行きが通過いたします。危ないですから、黄色い線より内側にお下がりにください。

(SE 電車の接近音)

(ガヤ どよめき)

客 きゃーっ!

マサ おいっ、やめろ!

(SE 人が倒れる音、直後に電車の通過音)

マサ はあはあ……。おい! 何やってるんだよ!

ハル あ……。ごめんなさい……。私、何だか電車に吸い込まれるように……。

マサ まったく、あぶなかったぜ。ハルさん。

ハル え? ……あ、マサくん?

音楽

アナウンサー 東裕之作「天使のお仕事」

●駅のベンチ

マサ ハルさん、ちょっとベンチで休もう。いやあ、ヒヤッとしたぜえ。まあ、何事もなくよかった。

ハル マサくん……、本当にありがとう。マサくんが腕を引っ張ってくれなかったら……。私、どうしちゃったんだろう。

マサ しかし、久しぶりだなあ。最後に会ったのは、もう10年以上前じゃなかったかな。

ハル そうよね、……よく私だってわかったわね。私、……老けちゃって……。

マサ 何言ってるんだよ。ハルさんは昔から変わらず綺麗だよ。なあ、ヒロ。

ヒロ ああ、そうっすね。

ハル そんな……あの、そちらは？

ヒロ はじめましてヒロです。俺は……まあ、マサさんの弟子みたいなもので……。

ハル そうなの。いいわね……若いって……。

マサ ご主人は、トシは、元気でやってる？

ハル うん……相変わらず。定年になってからは、あちこちカメラ持って出かけてるわ。今日はあまり天気がよくないって、家にいるみたい。

マサ そうかあ、トシに会ってえなあ、今から行ってもいいかい？

ハル え？ ええ、まあ……いいわよ。

マサ よし、決まりだ！ ハルさん、家まで送っていくよ。

●トシ・ハルの家

マサ …とまあ、こんなわけなんだよ。ともかくハルさん、危ないところを助かってよかった。でトシ、ハルさんどうだ？

トシ ああ、おかげさまで奥で休んでるよ。……しかし、そんなことがあったとはな、ありがとうよ。マサ、本当にありがとう。

マサ まあ、タイミングが良かったんだ。お前から久しぶりに連絡もらって、心配になって向かってるときに、ちょうど駅でハルさんを見かけたんだから。お前からの連絡のことはハルさんには黙ってたが。とにかく大事なくてよかったよ。でも、どうしたんだ？ 確かにハルさん様子がおか

しいな。

トシ うん。なんだか、ここんとこ、ずっとふさぎこんでて。最近よくテレビで高齢者ドライバーによる事故のニュースとかやってるだろ。それ見るたびに、「私ももうダメだダメだ」、とか口走るようになってさ。ネットで調べてみたら、なんか高齢期の鬱の症状に幾つか当てはまるんだよ。それですごく心配になって、お前に連絡してみたんだ。お前、昔から何かと俺を助けてくれてたからな。

マサ そうだったか…。でも信じられねえなあ。ハルさんは昔からすごく活発で、スポーツ万能でテニスもうまかったし、車もよく運転してたよなあ。おまえ、よくハルさんの運転でドライブでかけてたじゃないか。

トシ うん。でも近頃運転もおっくうがって、一緒に出かけることも少なくなっとな。

マサ そうか……。あ、そうだ、お前たちにどうかと思って、持ってきたもんがあるんだ。おい、ヒロ！ 何うろうろしてるんだ、こっちに来て座れよ。

ヒロ あ、は〜い。

マサ こいつが、その市民ホールの音響の仕事とかやってさ、いいものが手に入ったんだ。おい、出せ。

ヒロ は〜い、チラシとチケットっすね。

マサ これだよ。

トシ え？ 「ちづるの小部屋」……。あのテレビの対談番組か。その公開収録が市民ホールであるのか。ゲストは……。えっ、高峰小百合！

マサ どうだ！

トシ すごいな！

マサ 高峰小百合！ 俺たちのマドンナだったよな。

ヒロ マドンナ？ ああ、今でいうアイドルっすか。

マサ いや、アイドルなんてもんじゃない！ 彼女はみんなの憧れだったんだよ。学生ときは、トシの部屋なんか、高峰小百合の写真だらけだったこともあったな。

ヒロ え、そんなに昔からのお知り合いだったんですか。

マサ そうだよ。ハルとトシをくっつけてやったのもこの俺だ。二人のキューピッドってとこかな。

ヒロ へえ、そうなんですか！ まさに天使っすね。

マサ どうだ、トシ、ハルさん連れて、行って来いよ。

トシ                    そうだな、気晴らしになるかな。  
マサ                    いや、きっと気晴らし以上だって！

●市民ホール ロビー

(ギャ ロビーで待つ観客)

案内係                おまたせしました。「ちづるの小部屋」の公開収録へお越しの方は、こちらの階段をお上がり  
                                 ください。  
マサ                    トシ、ハルさん！  
トシ                    おお、マサも来てたのか！  
ハル                    マサくん、今日のご招待ありがとうございます。こうして二人で出かけるの、久しぶりなのよ。  
マサ                    おう、ゆっくりしてってくれ。俺の席はちょっと離れているみたいだな。じゃ、またあとで。  
ヒロ                    マサさーん。  
マサ                    おう、ヒロか！ ちゃんと仕事しろよ！  
ヒロ                    は〜い。

●市民ホール内

AD                     では、本番行きま〜す。5秒前、4、3、2……。

(番組テーマ曲)

ちづる                こんにちは、「ちづるの小部屋」の時間です。ナビゲーターの西條ちづるです。今日は公開  
                                 収録でお届けします。さて今日のゲストは、歌手・女優・そしてエッセイストとしても活躍して  
                                 いる高峰小百合さんです。今日はようこそいらっしゃいました。  
小百合                どうぞ、よろしくお願ひします。  
ちづる                高峰小百合さんは、今年芸歴 50 年を迎えるということですが、いつまでも若々しくおき  
                                 れいでいらっしゃいますね。若さの秘訣みたいなものってあるんですか？。  
小百合                いいえ、若くはないよのよ。でもね、私はいつもトキメキをもって生きているの。  
ちづる                トキメキですか？。  
小百合                そう。今日の出会いは今日しかないと思うと、その日その日が楽しくてしかたがないのよ。今  
                                 日はどんな出会いがあるかしら、何が起こるのかしらと考えるとね。

ちづる それで、いつもキラキラと“ときめいて”いらっしゃるんですね。

小百合 そうかもしれないわね、そして、もう若くはないと言ったけれど、年齢もこの歳でしかできないことっていうのがあるのよ。例えば、私はずっと歌を歌ってきたけど、もう若い頃と同じようには歌えない。でもね、若いときには歌えなかった歌が、今は歌えるようになった。この歳だからこそ歌える歌があるのよ。

ちづる なるほど…。歌に深みが出てくるんですね。

小百合 若い頃は頭も柔らかいし、すぐに物を覚えられたり、体も自由に動かせたりしたけど……。でもね、歳を取ってからわかるもの、感じることもたくさんあるのよ。歳を重ねただけ味わえるものも増えていく。だから私、今が一番充実していると思っているの。

ちづる 素敵ですね。高峰さんは歌手としてデビューしてすごい人気で、それから女優業へと順風満帆でしたよね。

小百合 いいえ、とんでもない。私、実は自殺を考えたこともあるのよ。

ちづる ええっ！ そうなんですか？。

小百合 今だから言えるけど、ある方を一方的に好きになって、それがかなわないと知って、事務所のビルから飛び降りようとして……。でも、窓に足をかけた時に、誰かに腕を引っ張られたような気がして、後ろにひっくり返ったの。その時に、こんな声が聞こえたのよ。「おまえはひとりじゃない、ずっといっしょにいる。」って。……。ハッとしたわ。空耳かと思ったけど、確かに聞こえたの。私はずっとその声は何だかわからなかったけど、ある時、巡業先のホテルの部屋に置いてあった聖書を、寝る前にぱらぱら開いていたら、「神様がずっとともにいる」(マタイ 28:20)っていう言葉が出てきて、思わず「あっ」と声を出しちゃった。あの時の言葉はこれかもしれないって思ったの。それがきっかけで私、「この聖書の中には、どんなことが書いてあるんだろう」と強い興味がわいてきて、旅から帰って早速聖書を買ったの。難しいところもあったけど、何か、心にぐっと響く言葉もいっぱい出てきた。それ以来、私は神様の言葉、聖書をよりどころとして生きているのよ。

ちづる そんなことがあったんですね。それではその聖書の中に、高峰さんの座右の銘にしている言葉とか、ありましたか？

小百合 ええ、「白髪は栄えの冠」(箴言 16:31)っていう言葉を見つけてね。なんか、うれしくなったのね。これは、歳を重ねることは神様からの祝福だ、っていうような意味だと思うんだけど。それから「あなたがたが白髪になっても、わたしは背負う」(4ザヤ 46:4)とも書いてあった。何か、自分に向かって話されているような気がした。どんなに歳をとっても白髪になっても、神様は変わらずに大事にしてください…。そう思ったら、もううれしくてうれしくて、「これで生きて

いける。もう老いは怖くない」と思ったわ。その時から、私は年をとっても髪を染めない、って決めたのよ。

ちづる なるほど、今、ミドルエイジの女性をあこがれの、グレイヘアのはしりだったわけですね。

小百合 そうかもしれないわね。今ではグレイというよりも、だんだんホワイトに近づいてるみたいだけどね。(ふふっと笑う。)

(ステージの二人をじっと聞いているハルとトシ)

ハル (感動して嗚咽)うっ、うっ……。

トシ(小声) どうした? ……泣いてるのか?。

ハル(小声) 今まで私、若い時にできたことが一つ一つできなくなっていく自分が惨めで、価値がなくなっていくように思っていて……でもお話聞いて、私は今のこのままでいいんだって思えて、胸が熱くなって、なんだかとっても安らかな気持ちになって……。

トシ(小声) ハル……。

小百合 …そう、実は私、最近カメラを始めたのよ。これまでずっと私は人に撮られることばかりだったけど、これからは、人を撮っていきたいと思っているの。いろんな年代のその時その時の表情っていうのは、その時しかない輝きがあるのよ。そんな物を撮り溜めて、私のエッセイと一緒に本にしたいと思っているの。

ちづる いいですね! 楽しみにしています。今日は素敵なお話、ありがとうございました。では、最後に一曲歌っていただきますが、何を歌っていただけるのでしょうか?

小百合 はい、私のデビュー間もない頃の曲で「あなたの愛に」という歌なんだけど、「愛」というものをあの頃とは全然違う捉え方で、今は、もっと新しいトキメキをもって歌うことができるの。

ちづる では、お聴きください。高峰小百合さんの歌で「あなたの愛に」。

小百合(歌) ああ こんなにも 素晴らしい 愛があるのを

初めて知った

ああ 新しく生まれた私

あなたのもとを もう離れない

その熱い眼差しに 私は今ときめくのよ

その腕に支えられ 私は今輝くのよ

ああ、永遠に変わらない

愛に生きる喜び（繰り返し）愛に生きる喜び

●ホールロビー

（ギャ ホールから出て帰途につく観客）

会場アナウンス　本日は、ご来場いただきまして、まことにありがとうございました。お忘れ物のございませんよう、お気をつけてお帰りください。

ハル　　何だかとっても素敵な時間だったわ。

トシ　　そうか、それはよかった。

ハル　　実はね、言ってなかったけど、この間私、駅で電車にふっと飛び込みそうになって。

トシ　　ええっ、 そうなのか！ 大丈夫だったのか！

ハル　　うん。その時、誰かに腕を引っ張られた感じがして後ろに倒れたの。それで、何ともなかった……。

トシ　　そうか、それはよかった。

ハル　　うん。何とか心を落ち着かせて、家に帰ったら、あなたがいてよかった。。

トシ　　そうだったのか、何だか最近塞ぎぎみだったから、気晴らしになればとこのイベントに誘ったんだけど、何だか元気が出たみたいでホッとしたよ。

ハル　　うん。……ねえ、私も……カメラ始めてみようかな。あなた、教えてよ。

トシ　　おお、いいとも！ これから一緒にいろんな所に出かけよう。……あ、俺も一つ、始めたいと思って……。一緒に、……その…聖書を読んでみないか。

ハル　　私も、それ言おうと思ってた！

マサ　　お二人さん！ とてもよい公開収録でしたなあ。

トシ　　え？ あ、はい……。

ヒロ　　どうぞお幸せに。 それじゃあ！

トシ　　あの……、ああ、行っちゃった……。

ハル　　あなた、お知り合い？

トシ　　いや、知らない。……でもあの二人、どこかで会ったような……？。

●街中と天界の狭間

- ヒロ マサさん、一つ仕事が終わると、みんな俺たちのことは忘れちゃうんスカ？。
- マサ そうさ。記憶も、記録も何もかもなくなっちゃう。
- ヒロ え～～、それってなんだか虚しくないスカあ？。
- マサ 何言ってるんだ、俺たちは天使だぞ。あのかわいいキューピッドとやらは、人と人とを出会わせることになっているらしいが、俺たちはエンジェル、正真正銘の天使だ。キューピッド以上に、もっと大切な神様のお役目があるんだ！
- ヒロ 神様の...お役目...？
- マサ いいか、天使は、人を神様に会わせるのが役目だ。それが神様がお喜びになることだからな。そのお役目をちゃんと成し遂げるのが、神様に仕える俺たちにとっての一番の幸せってもんだ。
- ヒロ ああ、それでトシさんハルさんの学生時代にクラスメートのマサとして現れて、それ以来何十年も、二人がそろって神様のほうに心を向けるまで、寄り添ってきたってわけっスね。
- マサ そういうことだ。だが人には、天使であることをゼッタイに知られちゃいけない。それをお前がああの時は、「マサさんはまさに天使っスね」なんて言うから、バレるかと思ってハッとしたぜ。
- ヒロ どうもスンません。あ！ もしかして、高峰小百合の腕を引っ張ったのも、実はマサさんが……。
- マサ へへへ、さあな。さて、トシとハルの親友のマサはこれで消える。ヒロ、お前もだ。このべらんめえ口調もやめにして、次のお仕事に向かうぞ。今度はアメリカだ。Now we gotta go, flying over to New York.
- ヒロ え、ニューヨーク、スカ？
- マサ Are you ready?
- ヒロ は～い。…じゃなかった Yes, Sir !